

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分野	看護学分野
学籍番号	15S3014	院生氏名	木内 千晶
通学キャンパス	東京青山キャンパス		
論文題目	療養病床の看護職におけるワーク・エンゲイジメントのプロセスモデル		
審査結果(枠で囲む)	合格		不合格

<審査結果の要旨>

1. 主論文について

1) 研究の概要：療養型病床の現状は入院患者の超高齢化と在院日数の長期化に加え医療ニーズが高いにも関わらず、看護職の人員配置比率は20%以上と少ない。看護職の役割の増大は、多くのストレス環境を招き疲弊から健康障害をもたらし働く意欲が減少していく。この現状に着目し、療養病床に特化して、この状況を乗り越えるためにワーク・エンゲイジメント理論を活用して、いきいき働くための動機づけから行動に至るまでの3段階のプロセスを因果モデルとして構築した。さらに、ワーク・エンゲイジメントの因果モデルのプロセスの違いを職位、職種、性別により明らかにした新規性のある研究である。研究目的は、療養病床における看護職のワーク・エンゲイジメント・プロセス・モデルを構築し、仕事の資源および個人の資源がワーク・エンゲイジメントを介して心身の健康および仕事のパフォーマンスに影響する因果プロセスを明らかにすることにある。研究方法は、無記名自記式質問紙調査による横断研究である。研究対象は、東北地方79病院の療養病床に勤務する看護職1,786人で、回収数1,432人(回収率86.62%)、分析対象1,269人(有効回答率88.62%)である。調査期間は2016年9月から11月である。質問項目(項目数)は、日本語短縮版ユトレヒト・ワーク・エンゲイジメント尺度(9)、個人属性(15)、個人の資源として二次元レジリエンス要因尺度(21)、仕事の資源(28)、仕事の負担(14)、心身の健康(29)、仕事のパフォーマンス(9)である。分析方法は、文献検討結果から構築した構造方程式モデリングによりワーク・エンゲイジメント・プロセスモデルにデータを投入し、療養病床の看護職がいきいき働くための動機づけ⇒認知・感情⇒態度・行動の3段階のプロセスを明らかにする。統計解析ソフトは、SPSS Statistics Ver.24.0 およびAmos Ver.24.0を使用している。研究結果は、職場の要因と個人の要因が仕事に誇りを持ちいきいき働くポジティブ感情にどのように影響するか、その因果プロセスと関連の違いを、職位、職種、性別により明らかにした。結論は、療養病床における看護職が仕事に誇りを持ち、いきいきと活力がみなぎる働き方が出来る目的のために、ワーク・エンゲイジメントに影響を与える因果関係を明らかにした。

2) 研究方法：研究Ⅰの結果を踏まえて研究Ⅱへと関連性を明確に示し、研究ストーリーに一貫性のある論文構成である。研究目的を踏まえた国内外の先行研究と経験知から研究デザインを構成し、データ収集および分析、結果、考察、結論が示され、本研究の限界と課題が適切に表現されていた。倫理的配慮は、国際医療福祉大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施されていた(承認番号15-Ig-123)。

3) 知見の新規性と価値について：本研究の新規性は、療養病床を対象とした看護職(男女・准看護師を含む)の管理職と非管理職それぞれの個人特性を踏まえ、心身の健康を維持しながら仕事へ取り組む姿勢をポジティブに促進する動機づけ⇒認知・感情⇒態度・行動へと3段階のプロセスを因果モデルとして構築し、職位、職種、性別の複数の概念間の関連を同時に分析し、ワーク・エンゲイジメントの媒介効果を明らかにしたことにある。これらの新規性は、療養病床において、看護職(男女および准看護師を含む)を雇用している施設管理者の適切な支援体制に貢献する研究として高く評価できる。

2. 審査経過

審査会は2回開催し、初回審査において研究対象者である看護職の経験年数の追加および個人の資源をレジリエンスに限定した理由を述べることで、データ分析結果を図表で示していたが解説文の不十分な箇所と、研究の新規性を強調する加筆修正を求めた。2回目の審査は、初回審査で指摘した事項を論文全体に反映されているか確認するため、全論文の提出を求め各審査員で査読した。

その結果、適切に加筆修正されていた。

3. 口頭試問

初回の口頭試問の結果、研究デザインおよびデータ分析結果についてより具体的な研究過程の説明を求めたところ適切に応答した。研究データの分析は、段階を追い丁寧かつ正確に分析されていた。

以上の審査結果から、審査会の審査員全員は本論文の著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。

論文審査担当者	主 査 岡崎 美智子
	副 査 池田 俊也
	副 査 小嶋 章吾